

二つの「戦場」
-戦時下における石川達三の「戦争協力」、「徴用」
から敗戦まで-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2018-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 呉, 恵升 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/19758

二つの「戦場」

——戦時下における石川達三の「戦争協力」、「徴用」から敗戦まで——

Two “Battlefields”

——“War Efforts” of ISHIKAWA Tatsuzou from Requisition to the Defeat in World War II——

博士後期課程 日本文学専攻 二〇一六年度入学

呉 恵 升

WU Huisheng

【論文要旨】

社会派作家として知られている石川達三は、戦時下をどのように過ごしてきたのか。その実態については、具体的な資料をもって考察しなければならぬ。それは、「全集」未収録のものも含めて戦時下における石川達三の活動を精査し、文献や資料の収集を行うことによって、自ら

明確になることだと考える。

筆者の調査では、戦時下の石川達三には、省みられていない、その存在すら知られていない膨大な作品群が存在することが紛れない事実だ。そこで本論では、収集したこれらの一次資料に即して、太平洋戦争勃発に伴う「徴用」から敗戦までの間を射程に入れ、石川達三はどのように戦争と向き合ってきたのか、二つの「戦場」（前線と銃後）をどのように表象していたのか、その足跡を追駆して再考したいと思う。

【キーワード】 石川達三、「戦争協力」、徴用、海軍嘱託、銃後表象

はじめに

石川達三を語るに際して、多くの人が思い浮かべるのは第一回芥川賞の受賞作『蒼氓』（一九三五年）であり、筆禍事件を引き起こすことになったあの南京事件に取材した『生きてゐる兵隊』（一九三八年）、そして戦後の『人間の壁』（一九五七年）や『金環蝕』（一九六六年）など社会問題と切り結ぶ作品を次々と発表し、昭和四十四年に菊池寛賞を受賞した時の表彰理由「社会派文学への積年の努力」に象徴される「社会派」作家のイメージだろう。

しかし、筆禍事件からの名誉回復を狙った『武漢作戦』（一九三九年）をもって「戦争協力」への第一歩を踏み出したことを考えると、石川達三を総体で「社会派作家」と呼ぶにはいささか問題があるのではないか。というのも、太平洋戦争が開始される直前に「徴用」されることに

なった石川達三の敗戦までに発表した作品（小説やエッセイ、対談、など）を見ると、必ずしも「社会派作家」と呼べない面も見えてくるからである。

例えば、戦時下の石川達三に関して川上勉はその著『石川達三 昭和の時代の良識』（萌書房、二〇一六年六月）の「はじめに」の中で次のように述べているが、果たしてそのような評価は妥当かという問題がある。

五〇年を超える長年の文筆活動を通じて、しかも変転きわまりなかった昭和の時代にあつて、社会や政治に対する抗議と怒りの意志を表明し、首尾一貫した主張を貫き通したその態度に、あらためて瞠目し、敬意を表さざるをえない。（傍点引用者、以下同）

ここでは、どのように「首尾一貫した主張を貫き通した」のか、その具体的な内容については触れていないが、川上は石川達三の作品から「社会への抗議や怒り」を読みとって、その出発から亡くなるまでその思想は「変わらなかつた」との認識を示した。戦後すぐの小田切秀雄らの『生きてゐる兵隊』批判を経て、現代では「抵抗作家」「社会派作家」など石川達三への肯定的な評価が主流を占めるようになっていくが、戦時下の石川達三の評価に関しては果たしてそのようであつたのか。

まず、久保田正文『新・石川達三論』（一九七九年¹）につけて「石川達三年譜」に基づいて、「徵用」から敗戦まで石川達三が執筆した作品の数をリスト化すると、以下のようになる。

※表 1

	小説	評論・エッセイ・その他
一九四二年（昭和十七年）	〇点	三点
一九四三年（昭和十八年）	二点	〇点
一九四四年（昭和十九年）	一点	五点
一九四五年（昭和二十年）	一点	四点
計	四点	十二点

小説・評論その他、合わせて十六点の作品が「年譜」に記されている。これを受けてのことだと想像されるが（久保田正文『石川達三論』は一九七二年に刊行されたものである）、浜野健三郎は『評伝 石川達三の世界』（一九七六年²）の中で、次のように記している。

昭和十八年ごろから終戦に至るまでの期間、日本の文壇はほとんど見るべき作品を残していない。いって見れば、不毛の季節であつた。（中略）石川達三もまた、「仏印進駐誌³」を別にすれば、昭和十八年毎日新聞に「日常の戦ひ」を連載したくらいで、他にこれといったものも書いていない。

戦時下における「日本の文壇」は「不毛の季節」である考え方は、当時の〈常識的な〉戦時下文学の評価ということもあつて、石川達三に至っては「これといったもの」は「書いていない」といふ方は、ほか

の作家と同じように「見るべき作品」を書いていないのか、質に関わらず作品を書いていないのか、どちらとも取れる言葉だが、その実態については、具体的な資料をもって考察しなければならない。それは、「全集」未収録のものも含めて戦時下における石川達三の活動を精査し、文献や資料の収集を行うことによって、自ら明確になることだと考える。

※表2

	小説	評論・エッセイ・その他
一九四二年（昭和十七年）	〇点	十八点
一九四三年（昭和十八年）	三点	十八点
一九四四年（昭和十九年）	三点	十点
一九四五年（昭和二十年）	三点	七点
計	九点	五十三点

筆者の調査では、表2で示しているように、小説九点、評論・エッセイ・その他は五十三点、計六十二点の文章の掲載が確認できる（これからも引き続き調査していく必要がある。因みに『武漢作戦』以降の太平洋戦争が始まるまでの「戦争協力」作品の数については、小説やエッセイなど七十八点上る）。表1で示されている作品数の三倍以上だ。つまり、戦時下の石川達三には、省みられていない、その存在すら知られていない膨大な作品群が存在することが紛れない事実だ。なお、それらのような石川達三への肯定的な評価は、久保田正文『新・石川達三論』（一九七九年）につけている「石川達三年譜」の記述などにも象徴され

ているように、書誌の不備に起因するのではないかと私は思っている。そこで本論では、収集したこれらの一次資料に即して、太平洋戦争勃発に伴う「徴用」から敗戦までの間を射程に入れ、石川達三はどのように戦争と向き合ってきたのか、「二つ」の戦場（前線と銃後）をどのように表象していたのか、その足跡を追駆して再考したいと思う。

一、前線の「戦場」——「徴用」（海軍報道班員）へ

一九四一年十二月八日、太平洋戦争が開始された。その直前の一九四一年十一月に、多くの作家たちは「徴用令」を渡された。軍部は漢口攻略戦の際に組織された「ペン部隊」が「成功」した経験を基に、総動員体制を実現するため文学者、新聞記者、編集者（出版人）、画家など数多くの文芸関係者を戦場へ送り出した。その結果、マレー方面、ビルマ方面など別れ、軍報道班員としてそれぞれ各方面に赴いた。石川達三は海軍に徴用され、膨沽島、台湾を経由し、サイゴン、シンガポール、ジャワなど南洋各地を回って、一九四二年六月末に帰国した。この時期の自身の文学に対して、石川達三は戦後の『経験的小説論』（「文学界」一九六九年十一月〜一九七〇年四月、一九七〇年刊）の中で、こんな回想を行っている。

昭和十六年十二月、日本はアメリカと直接の戦争状態にはいった。それと同時に私は陸軍報道部の徴用令を受け、一週間ののち海軍報道部の徴用に切りかえられた。この時から二十年八月まで四年足らずの間は、私にとっては文学不毛の時期であった。

(中略) (報道部付海軍報道班員ということになったが引用者注)、新聞記者たちと違って通信網を持たない私には、直接報道の仕事ができる筈はなかった。(中略) 私もまた何ひとつ持たないで、手ぶらで敗戦を迎えた。自分の小説というものをどこか見失ったような気持ちだった。

報道班員として軍部に徴用されたが、その時代は「文学不毛の時期」であり、また新聞記者と違って「直接報道の仕事」ができなかった、という。この「手ぶら」という言葉に秘められているのは「何も書かなかった」ということであって、極言すれば、戦争に「非協力」的な態度に終始していたということになる。こういう石川達三自身の評価を額面通りに受け取った久保田正文はその著『石川達三論』(一九七二年)⁽⁶⁾の中で、「昭和十四年になってまたさかんな執筆活動のいきおいが回復し、それは翌年まで持続するが、昭和十六年から二十年までは作品の数も極端にすくなくなる」と同じ認識を示した。この時期の石川達三の言動に照らし合わせて、果たしてこの石川の言葉は回想や久保田の評価は真実であったのだろうか。

確かに、一九四一年十二月から一九四三年八月まで、石川達三による小説は一つも見当たらないが、表²でも示したように、軍部に徴用され、「海軍報道班員」として多くの文章を残した事実を見過ごすわけにはいかない。河原理子は「第三章 戦争末期の報国」(『戦争と検閲 石川達三を読み直す』所収、岩波新書、二〇一五年六月)の中で、この時期の石川達三について、以下のように述べている。

海軍報道班員となった達三は、船で、一九四二年一月にベトナムへ渡った。占領したばかりのシンガポールなどを回って、六月に帰国する。

大本営海軍報道部監修の『進撃 海軍報道班作家前線記録第一輯』に「新嘉坡への道」「昭南港に軍艦で乗込むの記」と題した短篇を発表している。たしかに達三の文章だが、読んでも印象に残らない。書けないことが多かったのからではないか。

(中略) 達三は、一九四二年は、東南アジアの見聞録などをいくつか雑誌に発表しているが、一九四三年には作品数はぐんと減っている。

河原理子は「一九四二年は、東南アジアの見聞録などをいくつか雑誌に発表しているが」と曖昧な書き方をしているが、私の調査では、海軍報道班員として発表した文章(対談も含む)は以下の十二点ある。ちなみに、後述している海軍報道班員としての経験に基づいて書かれた文章(九点)も含めて、これらの作品はほとんど『石川達三作品集』(二十五巻、新潮社、一九七二年)に収録されていないばかりではなく、これまでもどの公刊されたものの中にも収録されていない。

1、「蘭印機撃墜！」磨きあげられた科学力」(『読売新聞』、一九四二年三月三日期刊)。

2、「昭南島便り 真紅の花に映える建設 国家意識なく晏如たる捕虜の群」(『読売新聞』、一九四二年三月十七日期刊)。

- 3、「艦内日記―昭南軍港入り―」(「海之世界」、一九四二年四月)。
 - 4、「ジャバを染める日本色 バンドンにて発」(「朝日新聞」、一九四二年五月四日朝刊)。
 - 5、「沈む船に非道い置去り 日本潜水艦に救はる 英人を呪ふビルマ人と印度人」(「朝日新聞」、一九四二年五月十八日朝刊)。
 - 6、「昭南島従軍記(新嘉坡への道)」(「主婦の友」、一九四二年五月)。
 - 7、「これが海軍魂だ」(「サンデー毎日」、一九四二年八月二日)。
 - 8、「海を護る心」(「放送」、一九四二年九月)。
 - 9、「南方見聞 石川達三・宮本三郎対談」(「新女苑」、一九四二年九月)。
 - 10、「見たか聞いたか、カメラに描いたこの戦果! 大東亜戦争記録映画を語る座談会」(「映画之友」、一九四二年十月)。
 - 11、「凄絶! ソロモンの大夜襲戦を語る 丹羽文雄と石川達三対談録」(「モダン日本」、一九四二年十月)。
 - 12、「ソロモン海戦考」(「婦人公論」、一九四二年十月)。
 - 13、「新嘉坡への道 昭南港へ軍艦で乗込むの記」(『進撃』所収、くろがね会編、博文館、一九四二年十二月)。
- 上記十二点、海軍報道班員として書いた文章のタイトルでもうかがえるように、日本戦力の高さ、戦果の宣伝、南方建設における着々たる進捗状況、原住民の協力ぶりが描かれている。
- 例えば、海軍報道班員として書いた「これが海軍魂だ」(「サンデー毎日」、一九四二年八月二日)は次のように始まっている。

私はタイ、ビルマ、比島を除く殆どの占領地を、あるひは軍艦で、あるひは飛行機で半年の間点々として旅して来た。戦闘と同行し、文化工作のお手伝いをし皇軍将兵や原住民と寝食をともにして実に多数の感慨にうたれた。まづ私が心から驚嘆し、敬服したことは、軍艦に乗つて、その訓練の徹底的であること、戦闘に対する態度が周到緻密を極め、その組織的な点、水も漏らさぬ精細な計画に、如何に必勝の信念を裏付けるに万全の準備がととのへられてゐるからといふことであつた。

ここから読み取れるのは、諸手を挙げての海軍礼賛であり、たとえ海軍からの要請があつて書いた文章であつたとしても、そのような軍部の要請を断れなかつた石川達三の心の在り様は、「軍部への抵抗」とか、「不同意」といふようなものではなかつた。石川は、軍部や当局に求められる文章を書き、本気で銃後の国民に必勝の信念を持たせようと努力していたとしか思われぬ。それでも「文学不毛」「手ぶら」ということになるのだろうか。

なお、上記以外に、この時の体験に基づいて戦時下に書かれたものを列記すれば、以下のようになる。また、石川達三が一九四三年に発表した文章は現在確認できるものだけでも計二十一点で、決して河原理子が言っているように、一九四二年(計一七点)よりぐんと減っているわけではない。むしろ、一九四三年は一九四二年より増えている。以下、海軍報道班員としての経験を元にしたと思われる文章だけを列記する。

- 1、「異郷に病む」(「文藝」、一九四二年十一月)。
 - 2、「南方隨筆 政治と宣伝」(「時局情報」、一九四三年一月)。
 - 3、「從軍手帖」(「婦人公論」、一九四三年二月)。
 - 4、「シンガポール総攻撃」(「映画之友」、一九四三年四月)。
 - 5、「艦と運命を共に! 山口・加来 兩提督の忠魂を偲ぶ」(「週刊朝日」、一九四三年五月十六日)。
 - 6、「南の夜空(上) 南十字星」(「朝日新聞」、一九四三年七月二十七日夕刊)。
 - 7、「胸の中の波音」(「週刊朝日」、一九四三年七月二十五日)。
 - 8、「南の夜空(中) 稲妻」(「朝日新聞」、一九四三年七月二十八日夕刊)。
 - 9、「南の夜空(下)月」(「朝日新聞」、一九四三年七月二十九日夕刊)。
- さて、では現地の住民は上記の文章の中でどのように表象されていたのか、まず、確認していききたい。例えば、「南方隨筆 政治と宣伝」(「時局情報」、一九四三年一月)の中に、次のような文章がある。

ペナン島の三月であつた。露店のとぎれた舗道の上には印度人、マライ人のひどく年老いた数人が胡坐をかいて、静かに博奕をしてゐるのだつた。(省略) これこそ国土をもたず祖国をもたぬ者のみの知る平和である。彼等のもつてゐる平和は、思ふに人類の持ち得る一番卑劣な平和である。これらはマライの住民といふよりは、マ

ライに住む生物といふに近い。

インド人やマライ人たちの「平和」について、「人類の持ちうる一番卑劣な平和」だとか、マライで生活する人たちに對して「マライの住民といふよりは、マライに住む生物」といった「差別」意識丸出しの表現は、当時戦争遂行勢力が唱えていた「日本人は大東亜の盟主」「大和民族の優秀性」と同じ思想から生まれたものと言ってよく、これらの文章を読むと、石川自身の当時は「手ぶら」で「文學不毛」だったという言葉も、にわかには信じがたい。

なお、「從軍手帖」(「婦人公論」、一九四三年二月)の中で、中国・海南島は次のように描かれている。

今日の乗機はダグラス二十一一人乗りの馴染みふかい型である。離陸するとすぐ雲の中であつた。やがて断雲の流れる間から海南島の山々が下に見えた。起伏の細かい山並みである。上空から見ただけでも文化に遠い、何か慘澹たる風景であつた。○○の街は汚穢そのものであつた。私は支那人と支那の社会とはどうしても心からの親しみが持てないやうに思ふ。彼等はわれわれの感情からはずるぶん遠いところに住んでゐるやうに思はれる。

さらに、「大東亜共同宣言」(「朝日新聞」、一九四三年十一月六日朝刊)は次のような内容である。

タイ、ビルマ、比島の民よ

夷等の踏み荒らしたる土の上に新しき吾等の花を咲かしめよ。

言葉一つとってみても「卑劣」「夷等」「汚穢」など、かなりの優越意識が丸見えなのである。三つの引用から見えてくるのは、繰り返すが、石川達三が「大和民族の優越性」を信じきり、他民族への「差別」意識を持っていたことである。特に、「夷」は明らかに「欧米帝国主義列強」を意味しており、日本（軍）の当時の戦争スローガン「欧米帝国主義列強のアジア支配からの解放」「大東亜共栄圏」構想が織り込まれているのが感じられよう。そして、そのような意識が戦争協力につながっていったのではないかと考える。この時期の石川達三が多くの言葉を費やして「戦争協力」を惜しまなかったことはこれらの文章に証明されている。

だが、上記合わせて二十二点の文章を以て、石川達三は海軍を全面的に讃える反面、厳しい批判も加えていた。「日本経済新聞」一九七八年三月一日〜三十一日に掲載された「徴用日記 私の履歴書」⁽¹¹⁾（これについては、戦後の発言なので、自身の「戦争協力」体験を「消したい」という思いが反映していた一面もある、とも考えられる）と照らし合わせれば、見えてくるはずである。一九四二年一月の日記に以下のような部分がある。

二十二日 上陸してから武官府に電話をかけたところ、艦隊副官は吾々の仕事は何も知らないと言う。海軍報道部は私たちを捕鯨船に乗せたままで忘れてしまったらしい。忘れられた私たちが、もしもこの街でしらぬ顔をしていたら、報道部も忘れっぱなしになるのではないだろうか。呆れ

たはなしだ。

二十六日 海軍の無秩序無計画に呆れて物が言えない。
二十八日 一体海軍というのは何をしているのだろうか、と私は思う。

南洋へ行く途中で、海軍に振り回されて、「呆れる」という言葉が繰り返して使われる。自分たちが徴用でこれほど協力しているのに、海軍はそのことを理解せず、自分たちの存在を無視している。先に引用した「これが海軍魂だ」に見られる「周到緻密」、「組織的」などの表象には程遠い。先の引用に続いて、以下のような言葉がある。

一九四二年二月十三日

シンガポールに於て陸軍付き報道班員五名死傷したという報告が入った。報道班員の事故も多くなった。エッシー号は救命ボードも不足しライフジャケットも無くて、しかも一切の武装なしで、船団も組まず、ただ一隻で夜の海へ出て行った。この輸送計画は軍部の無責任ではなかったろうか。角石君はまだ何の仕事もしないうちに行方不明になった。彼を犬死せしめたのは海軍の無計画のせいではないだろうか。

無謀な作戦を立て、失敗を繰り返したという海軍について、批判を加えている。実際、前出、「これが海軍魂だ」などに描かれているような「戦意昂揚」「海軍肯定」のものを、この「徴用日記」にまったく見るこ

とができない。軍部は自分たち報道班員を信用していなかったため、「報道の仕事」ができなかったこともあるが、むしろいろいろな記述から石川達三は軍部に対する不満が濃厚であることが鮮明になる。戦時下、軍部や政府を批判する表現が固く禁止されていた中、もちろん自分が目撃した「事実」をそのまま発表できるわけがないが、それにしても、なぜ石川達三は戦局に阿る「戦争協力」を意味する文章をこんなに書いたのか。「結婚生活を維持するために」などのほかに、おそらく以下のような「意識」があったからと思われる。

拓務省から派遣されて、義理にからまれた小説が何十編出てもそれが日本文学に大した毒を流すものでもなし、その作者が以後永久に義理を背負ふ訳でもない。あへて言ふならば、文学の清流を濁すやうな政治当局への義理小説、時局への阿諛小説がうんと出て来いと僕などは思ふ。そんなものがいくら出てても文学の本流は濁りもせず、作家の良心が崩れるものでもなからう。(「無用の論評」、「朝日新聞」、一九三九年五月三十日朝刊)

政府に派遣されたら、その意向に添った文章をいくら書いても文学の「本流」を濁すことがないと述べている。その文学の「本流」とは具体的に明確にされていないのだが、石川達三は時局に寄り添う立場を取ったのである。

このような認識に基づけば、たやすく「戦争協力」の文章を産み出したのも想像に難くない。

二、無給嘱託——国内へ

「石川達三年譜（前出）」にはもちろん、これまでほとんど言及されていないが（管見の限り、わずか前掲『評伝 石川達三の世界』で一言触れたただけ）、一九四二年の六月に南方から帰国した石川達三は海軍省に「無給嘱託」を志願し、一年間海軍報道部に入りましたことがあった。「嘱託の所感」⁽¹²⁾（月刊にひがた）、一九四六年一月）の中で、海軍の嘱託となった経緯を石川達三は以下のように書いている。

昭和十七年の夏、私は南方から内地へ帰って報道班員の任を解かれたが、間もなくガダルカナルの戦争がはじまり、戦況は難局に立つた。この重大な時にあたって私は書齋に引きこもって文学に精進するよりも、もつと直接戦争に関係した仕事をやりたいと思つた。そこで報道班員に徴用されて以来なじみのある海軍報道部へ出かけて行き、海軍報道部の仕事に協力したい旨を申し出た。丁中佐は私の希望を承知し、嘱託になつて貰ふことにするから書類を出してくれるようにと云つた。

「書齋に引きこもつて文学に精進する」より「直接戦争に関係した仕事」をやりたい石川は、自分から海軍省に無給で嘱託の話を持ち込んだと言う。ここからも石川達三が自ら進んで「戦争協力」しようとする姿が確認できる。同じ文章によると、その年（昭和十七年＝一九四二年）の十月に書類を出した。そして、嘱託の辞令をもらったのは翌年（昭和

十八年（一九四三年）の二月だ。つまり、「一人の無給嘱託を決定するのに四ヶ月を要するのである」と記した石川達三の不満や、海軍の仕事ぶりがうかがわれる。

そうして、希望して海軍の嘱託になった石川達三は戦場宣伝班という報道部の中の一室で仕事に参加するようになった。だが、そういう彼の情熱は見事に裏切られて、入ってから「定まつた仕事を与えられない」し、自分の発言にも何の「重きはおかれぬ」のであることを悟った。海軍が「いかに報道宣伝といふ仕事を軽蔑してゐるか、乃至は理解してゐなかつたか」について、改めて身をもって体験した石川達三は、次のように述べている。

戦局は日に月に急迫し、それにつれて国内の紊乱が目について来た。

「今は戦場宣伝どころではない。問題は国内宣伝だ。国内を固めずして何の戦争ぞや」と私は言つてみた。しかし無給嘱託の発言は冷たい風が吹いてすぎたぐらゐにしか彼等には感じられなかつた。

無給嘱託はつひに無能嘱託として、一年の海軍省通ひを切りあげて書齋にかへつた。得たところのもの、胸に重い憂愁のかたまりだけであつた。（前掲「嘱託の所感」）

ここで読み取れるのは、この時期（昭和十八年）の石川達三は国内の紊乱を問題視し、国内宣伝の重要性かつ緊迫性を主張していたことである。一年間の無給嘱託を通じて、報道部のデタラメさと国内の紊乱にあ

いまって、石川達三は国家（戦争）の行く末を案じて、この年に、国民運動を積極的に呼びかけ、「誓ひの会」を提唱するなど銃後運動と深く関わった行動を取った、という憶測も成り立つ。その実態は既に拙稿「戦時下における石川達三の「戦争協力」——日本文学報国会を中心とした「文芸銃後運動」との関わりを軸に——」（明治大学大学院紀要四八号、二〇一八年二月）に記した通りである。

なお、このことについては、「誓ひの会」の結成者である日本鋼管社長長の浅野良三氏と対面して意見交換した時、石川達三の次のような発言に現れている。

従軍して帰つて来てから、どうしても今までの行き方では駄目だ、問題は国内にある——と真剣に考へた結果、案出した会だつたのです、地方からわざわざ入会を申込んで来る人の気持といふものは、実に尊いものだと思ひます。（「新鋭「誓ひの会」へ 生みの親も嬉しい初の対面」、「朝日新聞」一九四三年三月十一日朝刊）。

「問題は国内宣伝だ」「問題は国内にある」これらの言葉の意味するものは、戦いは前線の戦場のみにあるのではなく、国内に銃後も戦わなければならない、という考えである。言い方を変えれば、国家総力戦の思想そのものである。

国外より国内と思つた石川達三は「銃後」に目を向けた。海軍省の一年間の無給嘱託を経て、失望した石川達三は「書齋にかへつた」。その「書齋」で達三はどんな仕事をしたのか。次節でもう一つの「戦場」

銃後が戦時下の石川達三文学においてはどのように表象されていたのかを、詳しく見ていきたいと思う。

三、もう一つの「戦場」——銃後

しかし考えてみると、「政治当局への義理小説」「時局への阿諛小説」がいくらで出ても「文学の本流」を濁さないと公言した石川達三は、表2で見られるように、「徴用」から一九四五年敗戦まで合わせて九点⁽¹³⁾の小説を著した。その内容を検討してみる。

- 1、『誰の戦争か』（『辻小説集』所収⁽¹⁴⁾、日本文学報国会、一九四三年八月）。掌篇。
- 2、『日常の戦ひ』（『毎日新聞』連載、一九四三年八月三十一日〜翌年一月十二日）。長篇。
- 3、『帰れ故里へ 交換船を迎へて』（『週刊朝日』、一九四三年十一月二十一日）。短篇。
- 4、『空襲奇談』（『文学報国』、一九四四年十月二十日）。短篇。
- 5、『生活の鏡』銃後拾遺Ⅱ備へあれど憂ひあり（『週刊朝日』、一九四四年十一月）。短篇。
- 6、『生活の鏡』銃後拾遺Ⅲ慈善と慈悪 煙は煙に非ず（『週刊朝日』、一九四四年十二月）。短篇。
- 7、『生活の鏡』銃後拾遺Ⅳ地上の富（『週刊朝日』、一九四五年一月）。短篇。
- 8、『成瀬南平の行状』（『毎日新聞』連載、一九四五年七月十四日〜

七月二十八日。十五回にて未完。

9、『沈黙の島』（『月刊毎日』、一九四五年第二卷第八号）。短篇。

「成瀬南平の行状」が未完であるため、今回は残りの八点の小説を分析対象として、敗戦までの石川達三の小説世界を俎上に載せたい。これら八点の内、『石川達三作品集』全二十五卷（新潮社、一九七二年二月〜一九七四年二月）に収められているのはわずか一篇『空襲奇談』しかない。特に、『生活の鏡』銃後拾遺Ⅲシリーズ『備へあれど憂ひあり』『慈善と慈悪 煙は煙に非ず』『地上の富』の三篇は収録どころか、その存在すら今までほとんど知られていなかった。ちなみに、この八点の小説の先行研究に関しては、『沈黙の島』、『空襲奇談』以外には、管見の限り、存在しない。

『誰の戦争か』は原稿用紙一枚の小説である。「昭和十五年の春ドイツ軍はマジノ線に向かって殺到した」が、「パリの市民は遊んでいた」。突破されても、彼らは軍人や奇蹟を信じた。パリの陥落を迎えた市民は「口々に政府を罵ったが、誰一人として銃を取って立つ者は居なかった」。戦時には市民（国民）も銃を取れ」という主旨が明らかである。同じようなモチーフにした、『帰れ故里へ 交換船を迎へて』という短篇小説がある。語り手・「私」は十年前前に船で南米帰りの時、ロサンゼルスから乗ってきた鈴木六郎という二十三歳の青年と知り合った。彼はアメリカ生まれの日本人の二世で、在留日本人が受けている迫害を救おうとしてロサンゼルスで弁護士を目指している。もし日米戦争が起きたら、どういう立場を取るかという「私」からの質問に対して、

「米国の軍隊に徴集せられ」るから、「日本の弾丸によつて殺されたい」と鈴木君は答えた。それを聞いた「私」は「どうしてもうけとけられぬ他人を感じてゐた」。それから十年が経つていて、今年の三月ごろに、私は新聞が載せている「大東亜戦争死者の論功行賞発表」の中で「鈴木六郎」の名前を見つけた。新聞社に詳細情報を調査してもらつと、やはり十年前のその人で間違ひなかつた。「私」は以下のような感想を漏らした。

自分といふ小さな存在は消えて、祖国をどうするかといふ問題だけが光り輝いてゐた。彼はその取るべき途を誤らなかつた。アメリカに住まうとフランスに住まうと、日本人はつひに日本人でしかあり得なかつた。(中略)なぜ鈴木君は日本に帰つて来たか、なぜ米国の華美をすてて日本に戻つて来たか。理屈ではない、それが日本の尊厳だ、歴史の尊厳だと思ふ。何ものにもかへ難いこの国家の尊厳が、彼をして日本に帰らしめたに違ひない。この美しき国土、この敦厚なる国民性をふかく愛するが故に、彼は命をすててその護りについたのである。

ちなみに、この小説は「週刊朝日」一九四三年十一月二十一日発行の「学徒出陣特輯号」に掲載されたものである。十年前からの迫害問題に象徴される日米関係を、現下の日米戦争に二重写しにして、米国の憎らしさを「日本の有難さ」に對置させ、交戦国・アメリカへの敵愾心を露骨に煽つてゐる。そして、「鈴木六郎」という青年の物語を通じて、「日

本人はつひに日本人でしかあり得ないこと」ナショナリズムの発揚をもつて青年学徒の出陣を鼓舞した。

また、「軍に従つてよく勲功をたて、死をもつて忠勤をばげんだ彼の行動を考へて見ると、何か肅然として襟を正すものがあるのだつた」などと、戦死への賞賛をしている点も見逃せないポイントだ。それを讀んで、影響を受けて、勇んで戦場(戦死)へ行つたかもしれない青年学徒がいるからである。

『日常の戦ひ』は百十三回にわたつて連載された長篇小説である。タイトルにも示されている通り、「日常の一切を戦ひとすること」||「毎日々々が戦争だ」をモチーフにした作品である。主人公は英文学を専攻とする某私立大学予科の大学助教教授谷口伸太郎だ。物語は谷口伸太郎及びその家族や周りの人々を中心に展開され、彼らの日常の姿を通して、銃後の生活ぶりを描き出している。この作品は翌年の昭和十九年に、東宝映画より映画化された。「新映画」(一九四四年七月)に紹介されて、「決戦下、銃後生活の正しき在り方を捉へる」との評価を出している。ここでいう「銃後生活の正しき在り方」は作中に明確に示されている。

第一、利害を打算するな。これは奉仕の精神であり、犠牲と献身との心である。一切の私を棄て去ることである。(後略)

第二、村を以て自分の家と観ずる事。(中略)一村の平和と隆昌とは即ち戦力の増強である。民心揺がされれば戦力揺がず。必ずや勝利に寄与すべきものありと信ずる。

第三、積極的であれ。(中略) 国難を支へるものはただ一つ国民各自の実行力のみである。

第四、草莽の心を持ち、遠大なる理想を樹立せよ。自らを草莽の微臣と観ずるならば、不遜なる欲望に迷ふことなく、不逞なる争ひを生ずることもない筈である。多少の不自由に挫けず、遠大なる理想を樹立せよ。努力の報酬を今日に求めず、光輝ある勝利を以て報酬と考へるべきである。

主人公の谷口伸太郎が考えている「銃後国民生活のあるべき姿」であるが、そのまま作者である石川達三の認識の反映であろう。「利害を打算するな」「一切の私を棄て去る」を戦時下のスローガン「欲しがりません、勝つまでは！」に置き換えても何の違和感もなく、「村を以て自分の家と観ずる事」はそのまま八紘一字の思想で間違いなだらう。「積極的であれ」は「問に合わせませう」を意味し、「草莽の微臣」「遠大なる理想」はほかでもなく、天皇制国家主義や将来の東洋民族解放独立を掲げる東亜共栄圏思想そのものである。つまり、それらのスローガンに象徴される戦争への総動員態勢が、この作品に横溢している。

前出した「新映画」の同文章によると、『日常の戦ひ』は「最近の新聞小説では最も大きな好評を博してある。この小説が発表されてから「谷口伸太郎型」といふ言葉さへ生まれた位」という部分がある。谷口伸太郎が銃後の模範として受け入れられていることを物語っている。いわゆる「谷口伸太郎型」がどのように表象されているのか、その詳細を見てみよう。「私たちの日常も全力をあげて戦はなくてはならない」と

の基本認識に基づいて、谷口伸太郎が自身の専攻としてきた英文学について、この戦争遂行のために、「何等の指導をも暗示をも与へてくれない」との考えを示し、外来の思想を攻撃した。石川達三自身も英文科(一年で中退したが)の出身にもかかわらず、である。「こころの底まで豊かな日本人となるために」、大学の仕事をやめて、郷里に帰って、国民学校の教師を務めながら、「子供の時に与へられた教育」＝日本の古典回帰、そこからやり直そうとする如く、内面化されてしまっている。彼は所属する隣組の組長を献身的に勤め、銃後の国民結束や職域奉公に力を発揮した。

その伸太郎の弟である新聞社に務める丹次郎も、結婚二ヶ月目に妻・ふき子を兄に預けて前線に赴く。その夫を戦場に送り出したふき子も骨惜しみする事なく働き、銃後の女性としての健気さが表象されている。「賢夫」・「賢婦」を顕彰するシナリオになっている。

『空襲奇談』は短篇小説である。反枢軸側某国に一人の科学者が空気と水を燃料とし、自働帰還装置も備えている新型軽爆を開発し、試験も大成功であった。飛行機工場で大量生産され、三ヶ月のち敵国の艦船を次から次へと撃沈した。戦勝が期待できたところ、人心は弛緩し、奢侈の風がはびこり勤労精神も崩れはじめた。更に二百二十機生産され、戦場へ出されたが、一機だけ帰ってきた。ほかの二百十九機は生産された工場に向かって全弾を投下した。後で分かったのは、工場の組立工員がいい加減な仕事をやったため、その二百十九機はことごとく故障機であったからだ。

この連合国側の国を舞台とする小説について、河原理子が「第三章

戦争末期の報国「『戦争と検閲 石川達三を読み直す』所収、岩波書店、二〇一五年六月）の中で、以下のような評価を行っている。

某国は「反枢軸側の某国」と書いてあるから、反日ではない。軍事機密にも触れていない。人心に活を入れたものと、読めなくもない。しかし、そうした制約のなかで、戦争のばからしさを、笑いに包んで示し、科学技術万能信仰に疑問を呈している。

「戦争」への「揶揄」と肯定的に読んでいたが、『空襲奇談』が発表された前後の石川達三の言動を見てみると、むしろ違うものが見えてくる。同じ十月に「週刊朝日」（十月八日）に掲載された「制勝の鍵・総努力 各自の持場に隘路はないか」の中で、石川達三は銃後の国民に向けて、次のように呼びかけている。

吾々の分担する任務は各々ちがつてゐるが、吾々のうち一人でも、その任務を怠つたならば、そこに隘路が生ずる。農民が米を作らなければ食糧問題といふ隘路ができる。大工が家を造らなければ住宅難が生じ徴用工員の宿舍難となり待遇問題となる。（中略）吾々は自分の考へ違ひや不心得の為に隘路を作つてはならぬ。

（中略）十九年度飛行機生産目標は是非完成しなくてはならない。吾々の油断、吾々の怠惰はたちまち日本の運命を危殆に陥し入れる。隘路を作るな。吾々の一人と雖も、生産の隘路になつてはならぬ。

「隘路」という言葉の多出に目を引くだろう。タイトル（「制勝の鍵・総努力 各自の持場に隘路はないか」）にも示されているように、石川達三は銃後の国民に向けて「各自の持場に隘路はないか」、換言すれば、自分の「任務を怠」っていないか、と問いつめる。国民総力戦の思想に相応しく、「制勝」するためには一人一人各自を任務を完遂せよと呼びかけている。

これらのことを踏まえて、もう一度「空襲奇談」を読み返すと、石川達三の〈真意〉が出てくるのではないか、と思われる。試験の段階で一同は「沈黙のまま」「紅茶」を飲んでいたので、戦場の成功を一度味わった司令官は二百二十機が戦場に出た時、「シャンパン」「ベエコン」「チーズ」「七面鳥」を嗜むことになる。一方で、工員たちは配給されたハムとビールで、なま酔いの鼻唄まじりで仕事をしていった。そのため、作られた飛行機は故障機になる結果をもたらした。つまり、いい加減な仕事をしていた〈民衆〉側のミス（＝隘路）に警鐘をならし、批判の矢をむけている、ということである。「爆撃で手足をもぎ取られてしまった工員たち」は、「身から出た錆だ……」とつぶやかせたのは、民衆を反省させる意図があったことだろう。「大統領は屈辱的な単独講和の外交交渉をはじめつつあった」との結末をもって、まさに先に引いた「週刊朝日」に載せた文章「吾々の油断、吾々の怠惰はたちまち日本の運命を危殆に陥し入れる」ことへの小説化ではないだろうか。銃後の国民に向けて、各自の〈戦争協力〉を反省させようとする意図を持っていた小説、と考える方が当時の状況を考えて自然である。

上記文章のほかに、ほぼ同時期に「隘路」をタイトルに持つものは、

「隘路打開に努力」（『文学報国』一九四五年一月十日）もある。一九四五年一月に日本文学報国会の実践部長に就任する際、その機関誌である「文学報国」に寄せている文章である。その際立った多さがこの時期の石川達三は銃後の「隘路」を問題視しているがうかがえよう。そして、「隘路打開に努力する」石川達三の姿は次の小説にも引き継がれている。

『生活の鏡』銃後拾遺Ⅱ 備へあれど憂ひあり』は三人称の短篇小説である。主人公は坂本夫妻だ。「臆病」で「要心ぶか」い彼らは空襲に備えて、「隣組十二世帯のなかでどこよりも深く立派に」防空壕を作った。それでも不安で、防空壕の天井の土が崩れないように、突っ張りをしたり、いざという時の食糧の用意もしたりした。だが、戦況の不利が伝えられると、不安が助長され、次々に家財を助かるための防空壕や、個人壕も掘ることにした。しまいには「至るところ土籠の巢のやうな穴だらけ」になった。いわゆる「備へあれば憂ひを生じたのであった」。

この夫妻について、「語り手」は次のように批判を加えている。

不安の根源は敵機の来襲によつて蒙るところの損害の推算である。第一に命を失ふ、第二に重傷を負ふ、第三に家財を失ふ、第四に生活に困窮する。要するに未練であつた。国家が老大な犠牲を払つて戦つてゐる時に、この一家は何物をも犠牲にしたくなかつたのである。坂本夫妻の防空準備は一家族の為であつて、国家の為の防空ではなかつたのだ。

『生活の鏡』銃後拾遺Ⅱ』シリーズはこういう性質のものである。銃

後にいる（非協力）な生活ぶりを暴き、「鏡」としてもう一度自分を見直してほしい、というのが石川達三の意図だと思われる。

特に、『生活の鏡』銃後拾遺Ⅱ 地上の富』に注目したい。

金にしる物にしる、それらに執着するのは但自分一個の安全や自分一個の幸福に執着することに他ならなかつた。天から降つ来る敵の爆弾は気まぐれだ。この爆弾に対しては、自分一人で自分の身を守り切れるものではなかつた。恰も天災が個人の力で禦ぎ切れないやうに、敵の爆弾を防ぐにも、時局の艱難を乗り切るにも、自分一個の力で出来るものではなかつたのだ。結局金でもなく、物でもなく、本、当に頼りになるものは協力であり、国民結束の力であつたのだ。

銃後の戦争表象をテキストに織り込み、引き続き「国民結束」を呼びかけている姿がここでも確認できる。

『沈黙の島』⁽¹⁵⁾は「月刊毎日」（北京、一九四五年第二巻第八号）に発表した短篇小説である。補充部隊で勤務する「私」は、大暴風雨に襲われ、高野伍長とともにある小島に流されてしまう。島で出会った「男」から聞いた物語が語られる。高島は元来、好戦的で、長島との戦いの度毎に必ず勝つものだったが、収奪品の分配などをめぐる内紛で、大酋長は神に「彼等より言葉を奪ひ給へ」と祈り、民衆を「沈黙の民」にしてしまった。言葉を奪われた民衆は、戦闘意欲を失い、怠惰の民になっていった。強力政治を断行し、戦力の蓄積を備えている長島との次の戦いの中、言葉のない民衆には民心の結束がなかつたため、敗れてから滅亡に

導かれた。こういうストーリーである。

「比島作戦が始まつて間もなく従軍した私は」と始まるこの小説は、太平洋戦争最中という時間帯を提示し、「高野伍長」という「私」の部下も登場させ、「日本の軍人」であることを示した。

「この頃の高島の一族は標悍無比と言ひませうか好戦的と言ひませうか、何百隻のカヌーを連ねて長島の岸を襲ひ、戦ひの度毎に必ず勝つものでした」を読むと、高島はまさに日清戦争以来へ敗北を知らなかつた日本軍に支えられてきた日本に重ねることができると勝利品の分配で内紛騒ぎが起つたため、高島の大酋長は「民衆の発言を封ずるに如かず」と考え、神に「一年のあいだ彼等より言葉を奪ひ給へ」と祈つた結果、「沈黙の民」にされてしまったこの島の民衆は「見る見るうちに非常な怠惰の民になつていきました」。言論統制が敷かれていて、自由に発言できない当時の日本を暗示しているだろう。

こういう高島の滅亡の物語を聞いた「私」は、「それは誠に奇怪な物語であつて、睡魔と戦ひながら聞いてゐるうちに私は、自分自身がこの奇怪な島の奇怪な物語の中の一人物であるかのやうな、不思議な幻想に引きずり込まれて行くのであつた」と語っている。自分Ⅱ「日本の軍人」Ⅱ「日本人」を物語の一人物と重なり合うことによつて、当時の日本にその姿を重ね合わせられているのである。つまり、石川達三は日本（日本人）について何かを案じていることを伝える。その「何か」は一体どんなことだろう。

石川巧が「1—9 石川達三「沈黙の島」を読む¹⁶」（二〇一八年一月刊）の中で、「国家による言論統制を痛烈に批判するような小説」、「戦

争末期の日本に向けて放たれた痛烈な言論の矢だったといえる」という評価を出している。確かに言論統制への批判は石川達三の一つの意図で間違いないと思うが、以下のような文章を読めば、また別のものが浮かび上がってくる。敗戦からおおよそ半年が経っていた一九四六年二月に「文藝春秋」に掲載されている「海軍報道部」である。

日本の国内宣伝は官庁と言わず軍部と云わず、すべて民衆を知らず国民を「相手とせず」であつた。自分勝手の宣伝をやっておきながら国民を引きずろうとする暴力的なものであつた。二十年の春ごろ、機会あつて陸軍報道部長松村秀逸少将に会つた。その時私は、このままで行けば国内に暴動の起る危険を感じるが、陸軍宣伝局としてはどのような対策を考えているかと訊ねた。松村少将の曰く、「古今東西の歴史の示すところによれば、暴動に対して最も有効な適切なものは機関銃である」と。彼は、国民をすらも敵とする考えをもっていた。

「二十年の春ごろ」「国内に暴動の起る危険を感じ」ていたと告白している。『沈黙の島』では、高島の大酋長は民衆を「命令を黙々と従ふ者でなくてはならぬ」と考え、彼らの声を「無智な発言」と見て、その発言を封じた。だが、「言葉を封じられた彼等民衆が黙つてゐるはずはありません、あちらこちらで暴動を起りました」。その対策として、大酋長が取つた行動は「血族の者数名に命じて暴動の徒を厳罰に処し、浜辺の巖の上から鎗で突き殺して海中に投じました」。まさに、先に引いた

文章の中で、松村少将が言っている「機関銃」をもって暴動を制することだった。その結果としては、この小説の概要を見てきたとおりだ。つまり、この小説は当時の石川達三の問題意識の反映にはかならない。

言い換えれば、昭和二十年の石川達三は、国内の紊乱による暴動の可能性を予想し、その危険性を政府当局に気付かせたかった、と推測できる。また、発生した時の対策を促し、機関銃（それに象徴される暴力）を自国の国民に向けるのはいかに怪しからんか、をこの寓話で警世しようとしたのではないだろうか。

また、石川巧の同文章には、「ひとつ間違えば国家への叛逆者として処罰されかねない状況のなかで言論の自由を訴え続けた彼の姿勢に関しては、正しく評価しなければならぬ」と言っているが、「言論の自由を訴え続けた」石川達三の姿勢を評価するのは否定しない。ただ、それは決して「一つ間違えば国家への叛逆者として処罰されかねない状況」でないことは、すでに高崎隆治（「石川達三——その戦争末期の表現」、一九八一年¹⁷）に指摘されている通りである。

この時点では国家権力そのものが、（中略）なすところを知らずという状況で、やがて開始されるであろう本土空襲の前に、もはや打つべき手をもたぬ彼等は、たとえそれが自らに対するきびしい批判・非難であっても、「戦意高揚」のためであり、またそのための提言であれば、甘んじて受けざるを得ないという窮地に立たされていたのである。

権力はもはや国民の力を貸して、もたらう以外にないところまで追いつめられていたのである。つまり、種を明かせば、国家権力自体が、「言論の暢達」を図るにはどうしたらよいかという提案を行って、石川達三の提言も前掲の人々のそれも、権力のその要請・問いかけに応えたわけなのだ。（傍点、原文）

そのことは次のような文章を見ればより一層明確になる。一九四二年十二月に設立した大日本言論報国会の機関誌である「言論報国」だ。斎藤龍太郎「指導層の是正」（「言論報国」、一九四四年五月）（斎藤龍太郎は大日本言論報国会評議員、大日本編輯者協会会長であることを文章の最後に記している（引用者注））というものである。

かういふ隘路現象が種々なる事情から起ることは認めるべきだが、国策運営の主体である。官吏、準官吏、その他指導的立場にある人々のやり方が、その最も大きい原因を作つてゐることも否定できない。

（中略）国民はみなやらうとしてゐる。もはや、その一人々々に對つて説く必要はない。これら指導層の人々に対する是正こそ、言論人刻下の責務である。

大日本言論報国会の会員は情報局立ち会いの元で、戦争に協力的とされる評論家たちの中から選定されたという。言い換えれば、情報局はその反抗を許さない統制力を保持していた。

実際、石川達三は太平洋戦争の敗色が濃くなってきた一九四五年五月に「週刊毎日」に「草莽の言葉 国家の宣伝について」（五月六日）、

「草莽の言葉 真相とは何か」（五月十三日）、「草莽の言葉 声なき民」（五月二十日）、「草莽の言葉 悲しむべき告白」（五月二十七日）を立て続けに四回連載していた。

「草莽の言葉 悲しむべき告白」には次のような記述がある。

あらゆる根本的隘路は上層部に在つて民間には無いのだ。この憤りを上通しようと思へば、通路は塞がつて居り、せめて新聞への投書や雑誌への寄稿で輿論に訴へようとするものも一切の先鋭な言論は差し支へがあつて出せない。

上層部の「隘路」を厳しく指摘し、言論の不通を強く訴えた。情報局の肝いりである「言論報国」にしろ、敗戦まで休刊或いは廃刊をされることなく存続していた「週刊毎日」にしろ、政府・軍部に認知されているからこそ、掲載できたのではないだろうか。つまり、高崎が言うように、戦意昂揚のためであれば、国家権力は甘んじて批判を受けざるを得ない窮地に立たされていた。決して「処罰されかねない状況」ではなかったことは明らかである。なぜなら、今まで述べてきた通りだが、石川達三自身も戦時下の「戦争協力」の「実績」によって、おそらく軍部にも認められていたのであろう。

終わりに

ここまで、石川達三が「徴用」されて海軍報道班員として発表した文章や、「徴用」解除後の無給囑託を経て敗戦までの間、掲載された小説などについて、考察を加えてきた。「徴用」中の石川達三は政府や軍部に求められる文章を数多く執筆した。敗戦までに著された小説の分析を通して、石川達三は絶えずに戦時色の強い、銃後を鼓舞するような作品を紡ぎ続けてきた事實は、あきらかになっている。

表の「戦場」について、「これが海軍魂だ」（一九四二年）や「海を守る心」（同）といった諸文章のように、「尽忠報国」を体現する海軍像は形象化されている。裏の「戦場」―銃後に関して、「谷口伸太郎」「鈴木六郎」みたいな、銃後の「お手本」となるような生き方をしている人物を仕立て上げられる特徴を有していた。しかも、それらは同時に侵略戦争を支える前線・銃後の姿にはかならない。

特に戦争末期には、言論の自由を訴えたり、戦争の勝利に向けて、国民生活における「隘路」を指摘したり、暴動の危険性をさらけ出したり、最後まで日本国家・民族の行く末を案じる憂国の士であった。ただ、石川達三はあくまでも聖戦遂行の立場に立って筆を取ってきて、国民の「戦争協力」を更に促せたための文章であったことを見逃すわけにはいかない。

戦後『経験的小説論』（前出）の中で、石川達三は「権力に対する庶民的な抵抗という姿勢は、ほとんど私の作家としての全生涯を通じて変わらなかった」と言っている。おそらく「拓務省から派遣されて、義理

にからまれた小説が何十編出てもそれが日本文学に大した毒を流すものでもなし、その作者が以後永久に義理を背負ふ訳でもない」（前出「無用の論評」との認識も直結しているだろう。石川達三のスタンスは「戦争協力」の文章が「義理にからまれ」て書き上げたもので、永久に責任を負う必要がないということである。

しかし、「八紘一字」を叫び、聖戦遂行を喧伝し、高揚するナシヨナリズムが鮮明に露見しているそれらの言動は、国民を戦争の泥沼に導いていく一助を担ったという意味で言えば、石川達三には責任の一端が免れない。

『武漢作戦』（一九三九年）を第一歩とし、全面「戦争協力」の道に進んでいった石川達三は戦後、どのような道筋で「再転向」したのか、自身の「戦争協力」について、どのように受け止められていたのか、を今後の課題とする。

- (1) 久保田正文『新・石川達三論』（永田書房、一九七九年十月）。
- (2) 浜野健三郎『評伝 石川達三の世界』（文藝春秋、一九七六年十月）。
- (3) 「仏印進駐誌」は、石川達三の回想によると、戦時下に書かれたものであるが、発表できず、その一部は戦後、「潮流」（一九四六（昭和二十一年七月まで）で連載されたが、未完であった。一九七九年一月、集英社より単行本『包囲された日本——仏印進駐誌』として刊行された。一九三七年の日中戦争から太平洋戦争開始まで、国内外の情勢を時間順につぶさに伝える作品である。ちなみに、インドシナ半島のヴェトナム、ラオス、カンボジア等は太平洋戦争の終了まではフランス領であり、日本ではこれを仏領印度支那、略して「仏印」と称していた。
- (4) 『石川達三作品集』（全二十五巻、新潮社、一九七二年—一九七四年）のことを指す。ちなみに、『石川達三全集』は現在のところ、編まれている。

い。

- (5) 一九三八年六月に漢口攻略戦が開始された。各界に戦争協力の要請が越され、文学界では「文学の力を發揮させよう」と内閣情報部と軍部との共同企画で集団として文学者を戦場に動員されるようになった。その結果、選ばれた二十二人の作家たちの従軍部隊が誕生し、文学者が戦争へと本格的に動員されるようになった。
- (6) 同氏による『新・石川達三論』も著した。浜野『石川達三評伝』の中で同じような考え方が示されている。
- (7) 「東京日日新聞」に連載されていた「風樹」は一九四一年十二月十日が最終回で、『辻小説集』（日本文学報国会、一九四三年八月）に収録されている「誰の戦争か」まで小説の発表が現時点で、確認できなかった。
- (8) 「蘭印機撃墜！」磨きあげられた科学力Ⅱ（『読売新聞』、一九四二年三月三日朝刊）とはタイトルや小見出しが違うが、内容はほぼ同じと見られる。
- (9) 出席者は以下のとおりである。石川達三、丹羽文雄、浅井達三（日映社員）、林田重雄（日映特派員）、土屋齊（日映時事映画編輯部長）で、浅井、林田両氏はカメラマンとして、支那、南方各地に活躍していたという。
- (10) 「昭南島従軍記（新嘉坡への道）」（主婦の友、一九四二年五月）とはほぼ同じ内容である。
- (11) 後に『徵用日記その他』（幻戯書房、二〇一五年八月十五日）に収録されている。
- (12) 久保田正文『新・石川達三論』につけた「年譜」をはじめ、石川達三の海軍省嘱託の経歴はほとんど触れられていない。なお、上記「年譜」や「石川達三著作目録」などに「嘱託の感想」と記されているが、本文引用文は正しい。
- (13) 他に、『評伝 石川達三の世界』（前出）によると、『遺書』（一九四五年六月二十五日「毎日新聞」用草稿、公表できず）という小説がある。同書にその草稿の全文が紹介されている。のちに『不信と不安の季節に——自由への道程』（文春文庫、一九七七年二月）にも収録されている。
- (14) 一九四三年五月に「建艦献金」運動として日本文学報国会の小説部門が提唱して刊行された。一九四三年、建艦献金運動が小説部会を中心となっ

て積極的に展開されるようになった。原稿用紙一枚の小説を執筆し、原稿料を献金することを目的として行われたこの活動の成果は、のちに『辻小説集』として刊行された。

- (15) 「沈黙の島」の掲載誌である「月刊毎日」は昭和十九年から昭和二十年にかけて、毎日新聞社北京支局が発行していた日本語総合雑誌である。日本国内資料機関に一切所蔵されず、石川巧氏の発掘によって公開されたものである。「沈黙の島」が載せられているのは一九四五年八月号と推測される。

- (16) 石川巧『幻の雑誌が語る戦争』所収（青土社、二〇一八年一月）、143頁。

- (17) 高崎隆治『戦時下文学の周辺』（風媒社、一九八一年二月）所収、32頁。